

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」放送原稿〈5月9日（金）放送分〉

テーマ「奄美の民話や昔話」

あまみエフエム ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。鹿児島県立奄美図書館です。今日は、毎月第2金曜日にお届けする、「奄美の民話や昔話」シリーズの第2回、与論町の昔話「食いくらび」です。

昔の話です。

島の若者たちは、風が吹いて海に行けなかったり、雨が降って畑の仕事ができなかったりする日は、夜になると集まっては自慢話をしたり、力比べをしたり、知恵比べをしたりして、過ごすものでした。

ある夜のことで。

その日の話は食べ比べになりました。一人の若者が、
「俺は、^{どんぶり}井で十杯もそうめんを食べることができる。」と言い出しました。

すると、フクルビという場所から来た若者が、
「なんだ、それぐらいでは自慢にはならない。俺は^{にしよう}二升の^{もちこめ}餅米を一度に食べることができるぞ。」と言いました。

若者たちは、それなら明日の晩、こいつに餅米の^{めし}二升飯を食べさせることにしよう、ということになりました。

そこで他の若者たちは、あちこちから餅米を集めて回りはじめました。

フクルビの若者は、これは困ったことになったなあと思いましたが、今さらどうすることもできません。

そこで、フクルビの若者は父に相談しました。父は、
「明日の朝から、何も食べないでお腹をすかしておけ。」と言いました。

それでも若者は心配でたまりませんでした。そこで、家の隣りに住んでいて、みんなから物知りだと言われているおじいさんのところに行って尋ねてみました。物知りのおじいさんは、

「餅米のご飯を^{ひとかま}一釜食べたら、おしっこに行くと行ってその場を抜け出し、食べた物を吐き出さない。」と言いました。

しかし、若者はまだ安心できませんでした。そこで、
「おじいさん、それ以外にもう一つ教えてください。」と言って頼みました。

おじいさんは、
「それでは太い^{なわおび}縄^し帯を締めて行きなさい。そして、もうどうしても食べられないときには、帯を解き、その帯を天井の柱に結びつけてぶらさがり、腹が減るまでクルクル回りなさい。」と教えてくれました。

次の日の夜、フクルビの若者は、太い縄で腹をクルクル巻いて、出かけて行きました。他の若者たちは、二つの釜を真ん中に置いて、輪になって座っていました。

いよいよフクルビの若者は餅米を食べ始めました。やっとのことで一釜は食べ終わりましたが、もうこれ以上はどうしてもお腹に入りそうにありません。

フクルビの若者は、みんなに向かって頼みました。

「ちょっと、おしっこに行かせてくれ。」

他の若者たちは、見張りをつけておしっこに行かせました。フクルビの若者は、見張りがそばについていたので、食べた物を吐き出すことができませんでした。

フクルビの若者は仕方なく、またひと口、ひと口と餅米を食べました。もうとてもとても、お腹には入りません。

そこで若者は、柱にすがりつきながら立ち上がりました。若者は縄の帯を解くと、その端を天井の横よこばしら柱に投げました。それから、おじいさんに教えられたように、縄にぶらさがりました。そして、何度も何度もクルクルと回りました。

すると、物知りのおじいさんの言うとおりに、少しお腹が減ってきました。

こうして、フクルビの若者は残りのご飯を全部食べることができました。

あくる日は、久しぶりにとても良い天気になりました。村の若者たちはみんな海に行き、魚をたくさん獲ってきました。

次の日も、次の日も、良い天気が続いて魚がたくさん獲れました。

フクルビの若者はというと、あの日から三日三晩寝ていたそうです。

さて、今回のお話はいかがでしたか。仲間どうしでの自慢話は、ついつい話が大きくなりがちですが、みんなの前で餅米を二升も食べることができると言ってしまったのは、後悔先に立たずでしたね。二升というと約3.6リットルですから、相当な大食い自慢でも厳しいと思われそうです。

また、物知りのおじいさんのアドバイスは、縄にぶらさがってクルクル回るというものでしたが、本当にそれでお腹が減るのかとても気になりますね。でも何だか逆に気分が悪くなりそうで怖い気もします。

若い人は食欲旺盛で、食事の量も多いと思いますが、暴飲暴食はいけませんね。俗ぞくに「腹八分目」と言いますが、ほどほどの量が健康的だと思います。

みなさんも、自慢話と食べ過ぎには十分お気をつけください。

このように奄美図書館には、郷土に伝わる昔話を紹介した本がたくさんあります。ぜひ図書館にいらして、いろいろな本を手にとってほしいと思います。職員一同、皆様のご来館を心よりお待ちしております。以上、鹿児島県立奄美図書館でした。